

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	堀松 徹雄
論文担当者	主査 松山 知弘
	副査 中西 健
	副査 若林 一郎
学位論文名	The distribution of calcified nodule and plaque rupture in patients with peripheral artery disease: an intravascular ultrasound analysis (下肢閉塞性動脈硬化症患者における石灰化結節とプラーク破綻の分布:血管内超音波を用いた検討)
<p style="text-align: center;">論文審査の結果の要旨</p> <p>急性冠症候群の原因である血管内血栓の形成要因として、プラーク破綻以外にも石灰化結節が報告されており、その分布や患者背景の違いについては既に報告されている。下肢動脈に血管内血栓を形成する閉塞性動脈硬化症においても石灰化結節やプラーク破綻を確認できるが、その下肢動脈における分布や患者背景については明らかにされておらず、今回申請者は血管内超音波を用いて詳細に検討した。解析対象は新規に腸骨大腿動脈病変に治療を施した下肢閉塞性動脈硬化症患者連続 175 人とし、治療前後の治療対象血管と評価可能な非治療対象血管を血管内超音波で観察した。プラーク破綻と石灰化結節は透視画像と比較してその位置を同定した。病変におけるステント拡張を定量的に評価し、石灰化結節群、プラーク破綻群、その他の群で比較検討した。血管内治療後の有害事象（突然死、下肢大切断、治療対象血管の再治療）の追跡期間は 1 年間とした。結果は合計 159 人（男性 118 人、女性 41 人）のうち約半数が糖尿病に罹患し、21%の患者に血液透析療法が行われていた。石灰化結節は下肢動脈全域に認められたにもかかわらず、プラーク破綻は下肢動脈の近位部に多く観察された。治療対象血管におけるステント拡張は、プラーク破綻群やその他の群と比較して、石灰化結節群で有意に不良であった。多変量解析の結果、維持血液透析施行が石灰化結節群の独立寄与因子であったが、プラーク破綻群に有意な因子は見られなかった。有害事象はプラーク破綻群と石灰化結節群のみであった。結語として、下肢動脈に広く分布する石灰化結節はステント拡張不全と関連し透析患者に多くみられ、プラーク破綻はステント拡張に影響しなかった。以上より、血管内治療を行う上で血管内超音波で病変を観察することにより、ステントの拡張不良やその慢性期成績を予測することを可能とする、社会的に意義のある研究であり、学位論文に値するものと評価した。</p>	